

だいたい・ほとんど

西 野 千 春

1. はじめに

(1) あのビルは だいたい 完成した。

(2) あのビルは ほとんど 完成した。

上の2つの文は、両方とも「あのビル」が完成に近い状態にあることを表しているが、どの程度完成に近いのか、その差は判然としない。本稿では「だいたい」「ほとんど」について両語の意味用法の差を考察する。

なお、「だいたい」には「だいたい、お前が悪いのだ。」という用法もあるが、ここでは除外する。(注)

2. 文献の記述

『岩波国語辞典 第四版』では、「だいたい」「ほとんど」について以下の記述がある。

だいたい ①ほとんど全部。大部分。またおおよそ。あらまし。(②略)

ほとんど ①おおかた。あらましのところ。すべて、全くとは言えないが、それに近い程度。

②もう少しのところで。すんでに。

また、森田1977では「だいたい」について次のように記述している。

「大体」は“全部ではないが、そのほとんど”を指す語。(中略)“九分九厘”つまり“あらまし”“おおよそ”である。この大部分意識がより抽象化すると、“完全ではないが、ほぼ”の意味となる。(p.120)

「ほとんど」については次のようにある。

全部とまではいかないが大部分、事柄に対して用いれば、完全とまではいかないが九分九厘、の意味になる。(p.416)

以上の記述により、両語は「全部」「完全」に近い程度を表すことがわかるが、その表す程度が両語の間でどのくらい違うのかははっきりしない。

両語の表す程度の違いは、その発想の違いと関係すると思われるが、森田1977では「だいたい」の発想について以下のようにある。

“完全な状態、正確な形でないにしろ、ほぼそれに近い状態”で物を考える意識

である。(p.120)

「ほとんど」については以下のようにある。

量を前提とした事物の全体に対し、その大部分を占める割合を取り立てる発想である。(p.417)

森田1977の記述は、「だいたい」の発想については興味深い。しかし、「ほとんど」の発想については次の例のように全体の大部分を占める割合を取り立てているとは考えにくいものもあることから、疑問に思われる。

(3) 筆無精で 手紙は ほとんど 書かない。

本稿では、両語の用法の差を見ることにより、両語の発想・表す意味内容について分析を行うことにする。

3. 分 析

3.1. 条件

まず、「だいたい」「ほとんど」の意味の差を認めにくい用法において、両語に修飾される語句にはどのような条件が必要だといえるのかを考えてみる。ここでは、両語の持つ意味の差については措いておく。

3.1.1. 基準

(4) そのタオルは だいたい／ほとんど 乾いた。

(5) だいたい／ほとんど 全員 集まった。

上の文で、「だいたい／ほとんど」は、「タオルが完全に乾いた」という状態（つまり濡れる前の元の状態）や「全員集まった」という状態を「基準」として、それに近い程度や量の状態であることを表している。

このことから、「だいたい／ほとんど」は何らかのものさしの上で程度や量を計れる事柄において、程度や量の定まった特定の状態を「基準」として、それに近い状態にあることを表していると考えられる。従って、両語に修飾される語句は、程度や量の定まった特定の状態を表していなければならないと考えられる。ここでは仮にこの「特定の状態」を「基準」と呼ぶ。

以下、両語に修飾される語句が実際にこの「基準」を表しているかどうか、確認してみることにする。

3.1.2. 両語に修飾される語句

3.1.2.1. 動詞句

(6) そのタオルは だいたい／ほとんど 乾いた。(= 4)

(7) その傷は だいたい／ほとんど 治った。

(8) 庭の雪が だいたい／ほとんど 解けた。

上の文で「乾く」「治る」「解ける」は主体の状態変動を表す。何れも変動の度合をものさしの上で計り、その程度を示すことが可能である。

(9) そのタオルは 少し 乾いた。

(10) その傷は 少し 治った。

(11) 庭の雪が 少し 解けた。

また、変動の完了を想定することができる。つまり、(6)ではタオルが水に濡れる前の元の状態、(7)では傷つく前の元の状態、(8)では雪が解けて無くなった時点で変動は完了するのである。つまり、「乾く」「治る」「解ける」は特定の状態（基準）への変動を表しているといえる。

(12)[×] 公園で遊んでいたら、服が だいたい／ほとんど 汚れた。

(13) 公園で遊んでいたら、服が 少し 汚れた。

(14)[×] 雨が降り出したため、髪が だいたい／ほとんど 濡れた。

(15) 雨が降り出したため、髪が 少し 濡れた。

「汚れる」「濡れる」は先の「乾く」等と同様に、主体の状態変動を表す。また、それぞれ変動の度合をものさしの上で計り、その程度を示すことが可能である。(13)(15)しかし、特定の状態（基準）への変動を表すのでないため、(12)(14)は不適格となる。

(16)[×] その乗客は だいたい／ほとんど 死んだ。

(17)[×] その乗客は 少し 死んだ。

(16)が不適格となるのは、(17)が不適格であることからわかるように、「死ぬ」がその変動の度合をものさしで計ることができないためである。

(18) あのビルは だいたい／ほとんど 完成した。

(19)[×] あのビルは 少し 完成した。

上の文で「完成した」は「完成」という特定の状態（基準）になったことを表している。(19)が不適格であることからわかるように、語そのものは基準への変動を表していない。しかし、「完成」までの変動の過程が想定でき、どれくらい近いのか、その度合を示すことが可能である。この動詞は、次に挙げる形容動詞に近いところがあると考えられる。

3.1.2.2. 形容動詞

(20) 速度は だいたい／ほとんど 一定だ。

(21) 会場は だいたい／ほとんど いっぱいだ。

上の文で「一定だ」「いっぱいだ」は特定の状態を表している。そして、それを基準としてどれくらい近いかを速度や人数というものさしで計って示すことが可能である。

(22)[×] この学校は 運動が だいたい／ほとんど 盛んだ。

(23)[×] 今日は仕事が多くて だいたい／ほとんど 大変だった。

上の文が不適格であるのは「盛んだ」「大変だ」が相対的な状態を表すためである。

3.1.2.3. 形容詞

形容詞は、大部分は相対的な状態を表すため、「だいたい／ほとんど」に修飾されない。

(24)[×] 花子は だいたい／ほとんど 背が 低い。

しかし、次のように特定の状態（基準）を表すものは修飾される。

(25) だいたい／ほとんど 丸い。

3.1.2.4. 数量詞

(26) 太郎は その本を だいたい／ほとんど 全部 読んだ。

(27) 先週は だいたい／ほとんど 毎日 雨だった。

上の文で「全部」「毎日」は量、頻度の上限を表しており、それを基準としてどのくらい近いかをものさしの上で計って示すことが可能である。

(28) だいたい 二時間 待った。

(29)[?] ほとんど 二時間 待った。

上の文のように、具体的な数量を表す数量詞を修飾する場合は、両語で表す内容が違って来る。これについては3.2.4.で述べる。

3.1.3. 文脈中の概念が修飾される場合

3.1.2.では、「だいたい／ほとんど」に修飾される語句が基準を表しているということを確認した。

ところで、「だいたい／ほとんど」が修飾するのは語句だけではない。文脈中に想定される概念が修飾されていると考えられる場合もある。次にそのような例を挙げて

みる。

(30) 洗濯物が だいたい／ほとんど 乾いた。

上の文は、二通りの解釈が可能である。

a. 一つの洗濯物が「完全に乾いた」という状態に近い状態にある。

b. 複数の洗濯物のうちの大部分が「乾いた」状態にある。

b の場合は次の(31)か(32)に言い換えられるが、a の場合は言い換えができない。

(31) 洗濯物のだいたい／ほとんどが 乾いた。

(32) だいたい／ほとんどの洗濯物が 乾いた。

「だいたい／ほとんど」は、a では「(洗濯物が) 乾いた」という語句を修飾しており、b では「主体の量」という文脈中に想定される量的概念を修飾しているといえる。

(33) だいたい／ほとんど 死んだ。

(34) だいたい／ほとんど 雨が 降っていた。

上の文では「死んだ」「(雨が) 降っていた」が基準を表す語句でないため、主体の量・頻度といった文脈中に想定される量的概念を修飾する場合の解釈しかできない。

(35)× その乗客は だいたい／ほとんど 死んだ。(a)

(36) その船の乗客は だいたい／ほとんど 死んだ。(b)

(37)× 昨日は 帰ろうとしたら だいたい／ほとんど 雨が 降っていた。(a)

(38) 先週は だいたい／ほとんど 雨が 降っていた。(b)

「だいたい／ほとんど」が文脈中の量的概念を修飾する場合には、共起する語句が基準を表すかどうかは問題にならない。文脈中に基準となる量が想定できるかどうかの問題になると考えられる。

上の文で(36)(38)が適格であるのは、「船の乗客全員」「毎日」という基準となる量が文脈中に想定できるからである。これらの基準を具体的な語で表せば、次のように言い換えられる。

(39) その船の乗客は だいたい／ほとんど 全員 死んだ。

(40) 先週は だいたい／ほとんど 毎日 雨が 降っていた。

一方、(35)(37)では文脈中に量的概念を想定することができないため、不適格になる。

文脈中に量的概念が想定できても、基準が想定できない場合は「だいたい／ほとんど」に修飾されない。次の文では「待った時間」という量は想定できるが、基準がないため不適格となる。

(41)× 昨日 太郎は 花子を だいたい／ほとんど 待った。

これは基準となる具体的な時間を補えば適格になる。

(42) 昨日 太郎は 花子を だいたい／?ほとんど 二時間 待った。

このように、文脈中の量的概念が修飾される場合も、基準が必要であるという点で、語句が修飾される場合と一致していると思われる。

3.2. 用法の差

3.1. で扱った用法は両語の意味の差を認めにくいものであった。ここでは、両語の用法の相違から意味の相違を考えてみる。

3.2.1. 否定表現

(43)[×] あのタオルは だいたい 乾かなかった。

(44) あのタオルは ほとんど 乾かなかった。

「ほとんど」は否定表現に用いることができるが、「だいたい」は用いることができない。(但し頻度を表す場合は(43)は適格である。)

否定の場合も基準と基準に近い状態とを比較して、それを程度や量として示せることが必要である。

(45)[×] 父は ほとんど 死ななかった。

(46)[×] 父は 少し 死んだ。

「死ぬ」は量や程度を示せないため、(45)は不適格になる。

(47) 太郎は 花子を ほとんど 待たなかった。

(48)[×] 太郎は 花子を ほとんど 待った。

(49) 秋田県でもうまい米として売り出し中の「あきこまち」には影響はほとんどなかった。(朝日新聞'88. 10. 6)

(50)[×] 「あきこまち」には ほとんど 影響があった。

「待つ」「影響がある」は肯定では基準を持たないが、否定では「(全く) 待たない」「(全く) 影響がない」という基準が想定できる。また、(47)(49)は次のように言い換えられる。

(51) 太郎は 花子を ほんの少し 待った。

(52) …影響は ほんの少し あった。

つまり、「ほとんど」は基準に非常に近いがほんのわずかに離れている状態を、基準からの量や程度を示すことによって表していると考えられる。

一方、「だいたい」は否定表現に用いられないことから、基準からどれだけ離れて

いるかは表さないと考えられる。

3.2.2. 接近を表す「ほとんど」

(53) 父は ほとんど 死ぬところだった。

(54)[×] 父は ほとんど 死んだ。

(55) 花子は ほとんど 帰ろうとしていた。

(56)[×] 花子は ほとんど 帰った。

(57) 毒とは知らずに ほとんど 飲みかけた。

(54)(56)が不適格であるのに対し、(53)(55)が適格であることから、「ほとんど」は「～するところだった」「～しようとしていた」「～しかけた」と呼応しているといえる。(53)(55)(57)は事態が生起りそうで起こらなかった状態を表している。ここでの「ほとんど」は「事態が生起する状態」に接近したがほんのわずかに離れている状態を表しているといえる。

このことは(57)と次の(58)の比較からも明らかである。

(58) 買っておいだ牛乳を ほとんど 飲んだ。

(58)では「飲んだ量」が表されているのに対し、(57)では「飲むという動作が生起する状態」に非常に接近した状態であったことが表されている。

ところでこの「事態が生起する状態」を基準としてとらえるなら、「ほとんど」は基準に接近したがほんのわずかに離れている状態を表しているといえる。そして、この接近の意味合いは、先にみてきた程度や量を表す場合にも共通して含まれていると考えられる。

一方、「だいたい」は「～するところだった」等と共起しないことから、接近の意味合いはないと考えられる。

(59)[×] 父は だいたい 死ぬところだった。

(60)[×] 花子は だいたい 帰ろうとしていた。

(61)[×] 毒とは知らずに だいたい 飲みかけた。

3.2.3. 近似値を示そうとする「だいたい」

2.で挙げたように、森田1977では「だいたい」について以下のような記述がある。

“完全な状態、正確な形でないにしろ、ほぼそれに近い状態”で物を考える意識である。(中略) 近似値的な値を示すところにねらいがある。(p.120)

次の例は、森田1977のいう「近似値的な値を示す」という意識を端的に表している

と考えられる。

(62) 彼は だいたい このような人物である。

(63) お宅は だいたい この辺りですか。

(64) だいたい いくらですか。

(65) だいたいの金額を 教えて下さい。

(66) だいたいの長さを 記録する。

(67) だいたいの目安を 決める。

(68) だいたいの見当を つける。

上の文で「だいたい」は程度や量を表しているのではない。

ここで共通しているのは、「彼の人物像」「家の位置」「金額」等の事柄を大まかにとらえ、その「近似値」(森田1977)を示そうとしていることである。つまり、ここでの「だいたい」は、物事を大まかにとらえて、ある値・ある状態に近いと見なそうとする意識を表しているといえる。従って、特定のものを指しており、大まかにとらえることのできない語句とは共起できない。

(69)[×] お宅は だいたい ここですか。

一方、「ほとんど」は3.2.2.で見たように接近の意味合いを含むことから、物事を大まかに幅広くとらえることはできないと考えられる。

(70)[×] 彼は ほとんど このような人物である。

(71)[×] お宅は ほとんど この辺りですか。

(72)[×] ほとんど いくらですか。

(73)[×] ほとんどの金額を 教えて下さい。

(74)[×] ほとんどの長さを 記録する。

(75)[×] ほとんどの目安を 決める。

(76)[×] ほとんどの見当を つける。

3.2.4 数量詞を修飾する用法

(77) 太郎は その本を だいたい／ほとんど 全部 読んだ。

上の文で「全部」は100ページの本なら100ページという読んだ量の上限を表している。従ってこの場合の「だいたい」「ほとんど」は共に全部より少ない量(100ページの本なら90ページくらい)を読んだ状態を表している。

ところが、具体的な数量を表す数量詞を修飾する場合は、両語の表す内容は違ってくる。

(78) だいたい 二時間 待った。(=28)

(79) この荷物は だいたい 5 kgの重さです。

ある特定の値に近い数量には、その値以上値以下の両方が考えられる。つまり(78)では二時間前後、(79)では5 kg前後の数量が表されているといえる。

(80)? ほとんど 二時間 待った。(=29)

(81)? この荷物は ほとんど 5 kgの重さです。

「ほとんど」の場合は、「だいたい」のように特定の値の上下を含んで表すことはできない。しかし(80)(81)は「二時間に達するくらい待った」「(秤の上にどんどん荷物を載せていってまたは荷物をどんどん減らしていって) 5 kgに達するくらいになった」という意味合いなら適格かもしれない。この場合、その表す数量は特定の値より上か下か、どちらか片方だけである。これは、「ほとんど」が接近の意味合いを持っているためであると考えられる。

3.3. 発想の差

以上「だいたい」「ほとんど」の用法の差を見てきたが、両語の用法に大きな違いが見られたことから、両語の意味の差が推察される。

両語の意味の差は物事のとらえ方の差である。「だいたい」は3.2.3.でみたように物事を大まかにとらえる発想である。一方「ほとんど」は3.2.2.でみたように接近の意味合いを含むことから、物事を精密にとらえる発想であるといえる。

この発想は「だいたい」「ほとんど」の全ての用法においてそれぞれ共通していると思われる。従って3.1.で同じに扱っておいた用法においても、根底にある発想の差から、その持つ意味合いが違ってくる。

例えば同じ90%を表していたとしても、「ほとんど」は10%足りないことを意識した90%であるのに対し、「だいたい」は大まかにみて100%と認めた90%であるといえる。さらにいえば、「だいたい」の方は大まかにみて100%と認められるなら、70%でも90%でも、「だいたい100%」ということができるとと思われる。

(82) 従ってキャベジンを飲んでいれば、胃の調子はだいたい良いわけです。

(医薬品の広告)

(83) 土田さんの赤ちゃんなら、ガラス箱に入っているのよ。もう殆ど出してもいいんだけど、二、三日前、又ちょっとお腹こわしちゃったみたいだから。(曾野綾子『羽織』新潮文庫 p.148)

(82)での「だいたい良い」は「全ての場合において良い」という基準を大まかにとら

えており、「良くない場合」は問題とせず容認してしまっている。一方(83)での「ほとんど良い」は「全ての点において良い」という基準を精密にとらえており、「良くない点」が指摘されている。

このような両語の発想によって、共起する語が制約をうける場合もある。

「だいたい」は容認の意味を含む表現に用いられるが、「ほとんど」はそのような表現に用いられにくい。

(84) だいたい わかれば 良い。

(85)? ほとんど わかれば 良い。

(86) だいたい かたづいたら 一休みしよう。

(87)? ほとんど かたづいたら 一休みしよう。

一方、「だいたい」は大まかにとらえることのできない極限的な状態を表す語とは共起しにくい傾向にあると思われる。

(88)? あの口紅は だいたい 真っ赤だ。

(89) あの口紅は ほとんど 真っ赤だ。

(90)^x 彼は だいたい 完全無欠である。

(91) 彼は ほとんど 完全無欠である。

4. まとめ

分析してきた結果を以下のようにまとめる。

「だいたい」 物事を大まかにとらえ、ある状態に近いと見なそうとする意識。またはそのような意識でとらえて、ある特定の状態を満たしている状態を表す。

「ほとんど」 ある特定の状態に接近しているが、そこからわずかに離れたところに位置している状態を表す。

(注) 『岩波国語辞典 第四版』には「もともと。もとはといえば。」とある。

／参考文献／

西尾実他編1986『岩波国語辞典 第四版』岩波書店

森田良行1977『基礎日本語』角川書店

花井裕1980「概略表現の程度副詞―「ほとんど」などについて」『日本語教育』42号

日本語教育学会

言語経歴 1967年東京都世田谷区生まれ

0歳～1歳 世田谷区

1歳～11歳 北海道旭川市

11歳～14歳 東京都渋谷区

14歳～ 神奈川県川崎市

(にしの ちはる・東京都立大学学生)